

社会福祉法人岩屋福祉会
岩屋保育園

保育課程

第1章

主題 子ども時代を子どもらしく生きる

第1節 保育の理念 私たちの思い

小さな共同体が伝承してきた文化のゆりかごの中で、主たる養育者を身内や隣近所が支えて子どもが育つ社会は、時代が移り、生活様式がどのように変化しようとも、また価値観がどれだけ多様化しようとも、子どもにとって必要不可欠な社会の在りようです。そうした社会に位置づけられ、子育て文化継承の拠点として、子どもたちが「子ども時代を子どもらしく生きること」を手助けできればと、岩屋保育園は日々の保育を実践しています。いわば身内やご近所のように子育てを手伝いたいと願っています。

保育園が果たすべき役割は、子どもたちへの直接的な保育のみならず、育児支援や地域づくりなど多岐にわたりますが、日々の保育活動にあっては、子どもたち一人ひとりを大切にするために、「子どもが周囲の人や周囲の事物に関わって、そこに内在する遊びを子ども自らが見つけ出し、工夫し、遊びこみ、伝承する保育」を基本とします。このような保育の実現のためには、「子どもと保育者がともに生活環境を創造し、展開する」ことが大切です。

保育園は、子どもと保育者がともに生きる生活の場です。そこに暮らす人々はお互いがお互いに「生活者モデル」です。遊びを中心に、生活者としての仕事や役割、一年を意味あるものにするための暦など、子ども時代が演出され、子どもらしく生きるためのカリキュラムが創意工夫されることで、子どもたちはいきいきといまを生き、社会に適応し、やがては社会を創造していく力の源となる「意欲の水瓶」を、心の深部に蓄えてゆきます。

「意欲の水瓶」をはたらかせるためには、自分が発揮できなければなりません。自分を発揮するためには、人とも上手くやれなければなりません。自己を充分発揮しつつ他者と協調することができる、そうすることで他者から自分が映し返されて、自分が他の誰でもない自分になってゆく。そのように子どもが一個の主体として尊重され、他の誰でもない主体となってゆくことこそ、保育者と保育園の普遍的な使命であると考えています。

第2節 保育の方針 私たちのゆくえ

1. 生きとし生けるもののひとりとして生きる ーともに生きるー

日本の伝統的な生活規範としての神道に学び、生きとし生けるものの生命を尊重し、人

もその中のひとりとしてこの地球環境に存在することを、私たちの在りようとしします。このように人の存在を位置づけることによって、人と人のみならず、あらゆる生命との多様な関係性を前提とする保育が求められることとなります。

人の在りようを生きとし生けるものの中の一人として位置づけることで、子どもの育ちは、能力発達を含む多様な関係性における自己性の変容として捉えられるでしょうし、環境教育や食育は、人間中心主義を脱した生きとし生けるものとの共生を前提として実践されることでしょう。

古今和歌集仮名序に紀貫之は、次のように記しています。

「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」

(自然の間に生を営むものにして、どれが歌を詠まないと申せましょうか)

自然のあいだに生を営むすべての生きものが歌を詠むというのですから、これ以上の共生はありません。そして、すべての生きものには心があり、心の発露として気持ちを歌に託して表現するというのですから、ここには岩屋保育園の理念のすべてがあるといっても過言ではないでしょう。

2. 私は私、でも私は私たちの中の私 —心が育つ—

子どもが自分をのびのびと発揮し、主体的に活動するためには、いつでも依存できる保育者を必要とします。依存は自立と対立するものではなく、自立を支えるものです。そのようにいつも支えてくれる保育者をかたわらに、子どもは周囲の子どもとの軋轢を超えて、共に生きていこうとします。そうした中から、待つこと、譲ること、思いやること、ずるはしないなど、倫理観や道徳性に繋がる多くを経験し、やがて「私は私でありながら、私たちの中の私でもある」ことを学びとります。

子どもの依存を支える保育者は、言葉によるコミュニケーションのみならず、表情や仕草、動作、態度といった非言語的コミュニケーションによる子どもの自己表出を理解し、子どものありのままをしっかりと受け止めて信頼関係を構築しなければなりません。そして子どもたちは、その信頼関係を土台として「人と関わり社会を築く力」を育みます。

子どもにとってともに生きるまわりの人々は、それが子どもであれ大人であれ、親であれ、保育者であれ、いろいろな自分を映し返してくれる存在です。まわりの人から主体として尊重されて子どもは、自分を見だし、自分らしくなってゆきます。“自分は他の誰でもない自分なのだ”と思えることが、なによりもまず大切です。

それはまた、保育者も保護者もおなじです。保育者も保護者も一個の主体として保育の場を生きていますから、感じたり、考えたり、願ったりしますし、ときには自分をつよく出したいと思うこともありますから、保育の場は、子どもと保護者と保育者の相互主体的な関係が多様に展開する場でもあります。その関係性の網の目が、子どもに「私は私、でも私は私たちの中の私」を実現してゆくのです。そのことこそが、子どもの心が育つことに他なりません。

3. 感性と想像性、創造力 一心がゆたかになる一

「だいすきなお父さん」と題された絵には、祇園祭が活写されていました。四つ切画用紙が横長につながれた、まるで屏風のようなこの絵を描いた男の子のお父さんは、祇園祭が大好きで、この子は物心ついた頃から毎年、鉾見物を欠かしたことがなく、「だいすきなおとうさん」を描くことは、おとうさんが大好きな祇園祭を描くことだったのです。昼食をはさんで4時間以上もかけて「だいすきなおとうさん」を仕上げました。

岩屋保育園を代表するオペレッタ「椎の実の森」には森を滅ぼそうとする老魔女バルバラが登場しますが、このオペレッタに出演した女の子が「どうしてバルバラは悪い人になってしまったの？」と、保育者に尋ねました。私たちは、敵と見方、善と悪、という二項対立によって物語を構成し、バルバラを敵として、悪として描いていましたが、この子は、バルバラを生まれながらの悪人とは決めつけませんでした。

絵で絵を教えたり、オペレッタでオペレッタを教えるのではなく、絵やオペレッタに子どもとともに取り組むことで、表現することの意味を子どもたちに伝えたいのです。表現することが生きることであるとするなら、私たちは、絵やオペレッタで、生きることの意味を子どもたちとともに考えたいのです。

どんなにすばらしい絵が完成し、どんなに上手なオペレッタが本番を飾ろうとも、生きることの意味は、その取り組みの過程である日々の保育の展開に、立ち現れます。

第3節 保育の目標 私たちの目あて

1. もうひとりの自分と、ともに生きる

今夜は何を食べようか、どんな服を着て出かけようかなどと、人はいつも考えています。そのような日ごろの些細なことばかりではなく、“あんなふうに云うんじゃなかった”と、人を傷つけてしまったひとことをふり返って後悔したり、“あの人はどう思っているんだろう”などと、相手の気持ちが知りたくなったりしたとき、人は自分の中の、もうひとりの自分と対話します。そのもうひとりの自分が自分に甘いと、容易なほうへ、楽なほうへと逃げようとします。とはいうものの、自分に厳しすぎて、本来の自分がぼきっと折れてしまっても本も子もありません。ですから、ほどほどのもうひとりの自分を自分の中に育てて、うまく折り合いをつけながら生きてゆくことが大切になります。

もうひとりの自分に褒めてもらったり、叱ってもらったり、励ましてもらったりして、ひとは生きているのです。そのもうひとりの自分が自分の中に生まれるまでは、周囲の大人がいろいろと助言してくれるのですが、もうひとりの自分が育つにしたがって周囲の大人の助言は減り、気づくと周囲の大人ともうひとりの自分が交替しています。そうになると子どもは周囲の大人との距離を測りながら生きてゆくのですが、それでも人はひとりでは生きられないので、あらためて周囲の人の存在が意味をもつようになります。

2. 大切な人と、ともに生きる

ここまで何度も取り上げてきたように、子どもは自分をとり巻く人たちの中で大きくなってゆきます。うれしいことやつらいことに出あったとき、周囲の人から共感してもらい、ときには慰められて、うれしいことを自分にとってうれしいこととして、つらいことを自分にとってつらいこととして、自分の中に収めてゆきます。

子どもは、幼ければ幼いほど周囲の人の言動によって自分の行動が左右されますが、大切なのは目に見える行動だけではなく、その行動を動かす気持ちや思いです。気持ちや思いは心にその根があります。うれしくなったり、つらいと感じたり、もう一度やってみようと思ったり、諦めてしまったりといった感情や意欲のもとになる心が育まれることこそが、重要なのです。

でも心は、やさしくなれるときもあればなれないときもあります。強いときもあれば弱いときもあります。そのように揺れ動きながらも、少しずつ子どもは、“ぼくはほかの誰でもない僕なんだ”、“私の人生の主役は、私自身なの”というように、自分を信頼し、自分を大切に、生きてゆけるようになります。このときにはすでに、子どもの中にもう一人の自分は誕生していて、本来の自分と葛藤を開始しています。その葛藤の繰り返しの中で、もう一人の自分は鍛えられてゆくのですが、その葛藤も元はといえば、周囲の人々とのあいだに生まれる共感や軋轢に端を発しています。ですから、周囲の人がどのような人なのかは、一人ひとりの子どもにとってとても重要であることがわかります。その重要な周囲の人とは、まずは家族です。そして、家庭において家族であるように、保育園において重要な周囲の人は保育者なのですが、家庭に兄弟姉妹がいるように、大人との関係において同じ立場に立つ友だちが、保育園にはいてくれます。

家庭と保育園というふたつの生活の場を、家族や保育者や友だちとともに生きること、子どもは大切な人から大切にされるよろこびを知り、それはやがて大切な人を大切にするよろこびにもなっていくのです。

3. 自分を打ち込めるものと、ともに生きる

しとしと降る雨にももの悲しくなることもあれば、しっとりと落ち着いた気分になることもあります。おなじお日さまなのに、寒い冬の陽射しはうれしく、暑い夏、アスファルトに照りつける陽光にはうんざりです。思えば身勝手ですが、人は周囲の人ばかりではなく、自分を取り巻く環境にも左右されて生きています。

保育園に目を転じれば、園庭の木々や木漏れ日、吹きぬける風が子どもにも保育者にもひとしく与えられ、戸外の心地よさが気づかないあいだにも感情のひだを育てています。土や砂や小石、小枝や葉っぱといった自然素材は、子どもを遊びに誘い込み、想像力をかきたて、創造性を育みます。三輪車を用意したり、ボールを買い求めたり、“どろじゅん”や“はないちもんめ”に誘ったり、スコップで砂場にお城を作ったりといった保育者の工夫もやはり、子どもを遊びに誘い込み、想像力をかきたて、創造性を育みます。

このようにして子どもは、周囲の環境の中に自分を打ち込めるものを見つけだし、周囲の人とともに遊びこむのですが、そのような遊びはいつしか子どもの中に“意欲の水瓶”を育て、そこに汲めども尽きることはない生きる力を貯蔵してゆきます。

“意欲の水瓶“は、”もうひとりの自分”と相俟って、自分が自分らしく生きることを手伝ってくれるに違いありません。

第4節 主題のまとめ

1. なぜ、「子ども時代を子どもらしく生きる」が主題なのか

ずるはしない。この気持ちこそ、岩屋保育園が培いたい精神です。なぜずるはいけないのかと問われても理由などありません。岡本夏木先生が、「よいことは、よいがゆえにする、悪いことは悪いがゆえにしない」それを学ぶのが幼児期だと書いておられるように、「たとえだれも見えていなくてもずるはできない」と、理屈抜きにそう思える倫理性は、子ども時代にしっかりと身に引き受けておかなければ、その後に万巻の書物を読もうとも、道徳の時間にどれほどのいい話を聞こうとも、あたりまえのこととして「ずるはしない」と思えるようにはなりません。書物や大人の話が子どもの肥やしになるためには、子どもの中にすでに「ずるはしない」がなければならぬのです。ではなぜそれが幼児期に可能なのか。それは子どもが純粋だからです。

「ずるはしない」という枠組みは、子どもたちが遊びの中で自分たちでルールを作り、そのルールを守らなければそのグループから相手にされなくなるという経験を積み重ねることで得るものです。そしてそのルール作りや、ルールを守ることによってルールから守られることを知るといふことの下敷きになっているものは、おそらく大人との約束関係によるのでしょう。でもそれだけでは、なぜ子ども時代なのかという問いには十分に答えてはいません。

子どもたちはおそらく、大人が想像する以上に新鮮な驚きをもって、さまざまな体験を積み重ねています。バッタと出あい、木の実を食べてあまりのすっぱさに顔をしかめ、跳べそうもないところを跳んでみて出血し、大人のすることに感心してみせたり、友だちに意地を張ってみせたかとおもえば、一緒に楽しいといってみたり……。工作に挑戦して創るよろこびを知り、歌い踊って内なるエネルギーを爆発させ、物語に胸を躍らせ……。そうした新鮮な驚きの連続のなかで、「我を忘れて没頭する」ことにかけては、大人はとてども子どもに敵いません。その純真な精神が、「ずるはしない」を培うのではないのでしょうか。子ども時代が人の生涯でもっともかけがえのない時代なのです。そして、この子ども時代のかげがえのなさに、子どもらしさもあるのです。「意欲の水瓶」はなにも、やる気をためるための入れものではありません。新鮮な驚きを保持するための器なのです。

ですから、〈取る：取られる〉の関係を子どものけんかとみなし、子どもどうしのトラブルだと判断して仲直りすることのみを子どもに求める保育からは、「ずるはしない」という倫理観は育ってきません。トラブルの解決から子どもは、自己主張と協調を学ぶのだというだけでは、不十分なのです。子ども時代を生きる子どもたちは、子どもどうしの激しい牽制のなかから、ぎりぎりのところで「ずるはしない」を学び取ってゆきます。ですからそこに大人が安易に介入してしまえば、子どもたちのなかに「ずるはしない」は育ちません。また、その“ぎりぎりのところ”こそ、子どもの純真さの現れであり、繰り返しになります。そのために子どもたちは新鮮な驚きと出会わなければならないのです。そこ

を急がせてしまつては、子ども時代を子どもから奪うことになるのです。

ではなぜ大人は子どもから子ども時代を奪おうとするのでしょうか。

いまの世の中は、価値の基準が損得におかれています。子どもの将来を案じる大人は、子どもの将来を先取りしようとしませんが、その将来も損得勘定に基づくため、早期教育や学歴へのこだわりが生み出されてしまうのです。いま、その「得の先取りの魔の手」が乳幼児期の子どもたちにまで及ぼうとしています。大きいことはいいことだ、はやいことはいいことだ、という思い込みから大人が解放されなければなりません。そのために大人は、子ども時代を生きる子どもたちから、多くを学ばなければならないのではないのでしょうか。

2. 理念はどのように方針に反映し、方針はどのように目標とされているのか

保育の方針では、はじめに人間中心主義を脱してあらゆる生命との多様な関係性に目を向けることの重要性を提示し、それを「ともに生きる」と表現しています。その上で、子どもの心が育つことと、子どもの心がゆたかになることをふたつの柱として、それが岩屋保育園の目指す保育の針路であることを示しています。

この方針をうけて、目標に子どもが「ともに生きる」ものを3つ掲げています。それは、もうひとりの自分であり、大切な人であり、自分を打ち込めるものです。もうひとりの自分と大切な人は、「私は私、でも私は私たちの中の私」を、自分を打ち込めるものは、「意欲の水瓶」を培うことを指しています。集約すれば、人はなぜ人を求めてやまないのか、人はなぜ生きるのか。このふたつの問いを問うのが保育の場なのです。